

明治31年創立「櫻井女塾」に関する研究

——日本女子高等學院との合併、戦前の英語教育など——

遠藤由紀子

Research on “Sakurai Onnajuku” founded in 1898

——Regarding the merger with “Nihonjoshi Koutougakuin”
and trends in English education before World War II——

ENDO Yukiko

I conducted a study on Sakurai Onnajuku, which was headed by female educators Chika Sakurai and Fuki Kuratsuji, who were families to each other. The study revealed how the said cram school was merged with Nihonjoshi Koutougakuin. The year of the merger was “1941”. It was confirmed that before the war, the faculty members of Nihonjoshi Koutougakuin valued English education without being tied to the prevalent public opinion of expelling English. As they celebrate their 100th anniversary of establishment, they would like to continue promoting education and research so that women can play an active role in and open up their lives to our globalizing society.

1. はじめに

令和2年(2020)9月10日、昭和女子大学は創立百周年を迎えた。教育もまた国家百年の計といわれるように、学園の百年には先哲の諸先生方や諸先輩方が積み上げてきた尊い歴史がある。筆者は、昭和女子大学大学院を修了し、女子教育・女性教育者に関する研究活動を行っているが、それらの調査過程で「櫻井ちか」(知嘉)という女性を知り得た。

櫻井ちか(1855～1928年)は平野与十郎の長女として生まれた。平野家は江戸の上野黒門町にて、徳川家歴代将軍の御霊屋で用いる祭式用具を扱う「神宝方」の御用達をしていた(千住1982:29)。ちかは、明治7年(1874)に受洗し、翌年より横浜にある共立女學院(現、横浜共立学園中学校・高等学校)にて学び、明治9年(1876)に櫻井女学校を創立した。ちかの経歴や功績に関するこれまでの研究は、管見によれば、ちかの曾孫にあたる櫻井淳司による『櫻井ちか小伝』(櫻井編1976)が嚆矢であり、それを基にした研究として千住克己(千住1982)、小林恵子(小林1982)¹、加藤澄江・川島麻由美(加藤・川

1 小林の関心は、草創期の幼稚園や保姆養成(幼稚保育科)にあり、私立として日本初の櫻井女学校附属幼稚園に関する研究が数編ある(他に小林1981、1983、1984、1986、1988など)。ちかの経歴に関しては、櫻井女学校附属幼稚園創立後の北海道移住までが述べられている。

島1987)²などがある。

櫻井女学校は、明治14年(1881)7月に矢島^{かじこ}揖子が校主代理となり引き継ぎ、明治22年(1889)に新栄女学校と合併、「女子学院」として発足、現在の女子学院中学校・高等学校(東京都千代田区一番町)に発展している。千住氏は、櫻井ちかの名は明治初年の女子教育史には必ず登場し、櫻井女学校は日本人による最初のキリスト教主義の女学校として高く評価されているが、「多くの女子教育史は、校名が消えた時点で以て桜井ちかの名をも忘れてしまうようだ。」(千住1982:29)と序文に記し、ちかの生い立ちからキリスト教入信、櫻井女学校創立の経緯、晩年までを入念に調査している。

ちかは、明治14年(1881)7月より夫の櫻井^{あきのり}昭恵(1845~1917年)³に従い、函館へ移住、その後、高知、大洲、敦賀などを遊歴、アメリカでの生活を経て⁴、明治31年(1898)に「櫻井女塾」を創立した。所在地は東京の本郷区向ヶ丘弥生町であり、女子寄宿舎が併設された。

「女学校設立願」(東京都編1968:149)に示された学科は修身、読方訳読、習字、作文、会話で、英語の教科書以外に地理書、万国史、文法書の教科書使用が指定された。明治末期の櫻井女塾では割烹や西洋料理などの料理法が教授されるようになり、ちかは教鞭をとる傍ら、数多くの女性雑誌に効率のよい家事の仕方や手軽に出来るお惣菜や西洋家庭料理の料理法などを紹介し、料理本も数冊出版している。

昭和3年(1928)にちかが亡くなると、2代塾長には養女の倉辻ふき⁵(1879~1945年)が就任した。ふきは、「櫻井女子英学塾」と校名改称し、さらに規模を拡張していったが、昭和10年代になるにつれ、英語教育への圧力が高まり、校運は衰退していった。

そして、櫻井女子英学塾は「塾長、教師、学生ともに日本女子高等学院(英文科、国文科、家政科)に合併し、日本女子専門学校を経て現在の昭和女子大学に発展してその歴史を維持している」(日本の英学一〇〇年編1968:440)と説明される。この来歴は、現在の昭和女子大学の大学案内や大学ホームページにある沿革には記されていない。また、合

-
- 2 加藤・川島論文は、近代の食形成に一役を担った女性としてちかを紹介しており、明治期の雑誌(『女学雑誌』『女学世界』『家庭の友』『婦人画報』『婦人世界』)にちかが寄稿した料理法についての調査であった。
 - 3 伊予国(現愛媛県)大洲藩の神官の長男で海軍士官。ちかと結婚後、ちかの影響を受けてキリスト教に接近し、明治9年(1876)8月に受洗した。洗礼後、海軍を辞し、キリスト教伝道師として活動した。ちかは昭恵の伝道に同行しながら、女子教育者としての活動を続けた。
 - 4 アメリカ滞在は渡航3回、合計4年間に渡り、第1回は明治26年(1893)~明治28年(1895)5月で、シカゴでの万国婦人矯風会大会への日本代表としての出席も兼ねていた。第2回は明治29年(1896)より1年間、第3回は明治40年(1907)であったが、詳しい動機、旅程、滞在費のことは全く不明である(千住1982:38)。ちか本人の3回目の渡米の視察、体験記については「米国人の見たる日本婦人と我が見たる米国夫人と」(『女学世界』1907年7月号)にまとめられている。
 - 5 『人事興信録』には「フキ」と示されるが、自らが寄稿した雑誌や同窓名簿には「ふき」とあるので、本論文では平仮名で表記する。

併について記載のある文献をみると、合併した年に整合性がなかった。

そこで、本論文は「櫻井女塾」の展開について調査し、櫻井女子英学塾と日本女子高等学院が合併された年とその経緯について明らかにすることを目的とする。これらを精査することで、当時の教育界のつながり、及び戦前の日本女子高等学院の立場などを確認し、百年を刻んだ昭和女子大学の確かな歩みを検証・確認する機会としたい。

なお、本論文では敬称は省略し、引用文の字体は概ね現行の印刷文字に改め、仮名遣いは原文のままとした。

2. 「櫻井女塾」の創立と展開

アメリカでの遊学を経て、帰京した櫻井ちかは、明治31年(1898)3月に「櫻井女塾」を創立した。43歳であった。女学校設立願にある生徒数は50名、寄宿制は10名、教員は1名とある(東京都編1968:153)。

同年1月の『女学雑誌』(458号)の「時報」には、見出しに「女子寄宿舎」とあり、「元櫻井女学校の創立者たりし櫻井ちか子氏は、此度東京本郷向か丘彌生町三番地の自宅に、女子寄宿舎を起し、基督教主義によりて、女生の監督をなすといふ。」とある。当初は、「寄宿舎」が主であったことが記事より推察でき、千住論文には「安い費用で家庭的雰囲気の下宿を、しかも、人格的、学問的に卓越した女性指導者の管理の下で、というのが櫻井女塾」(千住1982:39)とあった。櫻井女塾の内面的な支柱はキリスト教信仰で、寄宿生は毎朝英語と日本語で聖句の暗唱をしてから食卓につき、日曜日は昭恵の説教を中心とした礼拝、井深梶之助⁶を招いた礼拝もあった。通学の塾生には内村鑑三の集会に出るように勧められた(櫻井編1976:15)。

明治38年(1905)発行の『新撰東京女子遊学案内』(文學同志會)には、「私立英語専門・桜井女塾」と紹介され、学科は英語科が主であり、随意科として和漢文、裁縫、編み物、ピアノ、オルガン、修業年限は英語科・予科1年、本科2年、高等科1年であった。入学資格者は、高等小學校生若しくは之と同等以上の學力を有する女子、とあった(大月編1905:151~152)。

一方、生後間もなくちかの養女となったふきは、明治23年(1890)にちかの母校である共立女學校に寄宿生として入学し、明治31年(1898)に同校を卒業、同年東京音楽學校(現東京藝術大学音楽学部)に入学、明治34年(1901)同校を卒業し、倉辻明義(1877~1945年、筆名倉辻白蛇)と結婚した。愛媛県大洲市生まれの明義は松山中学で学び、明治31年(1898)に早稲田大学英語政治科を卒業したジャーナリストであった(人

6 1854~1940年。会津藩出身。明治6年(1873)受洗し、J・C・ヘボンに学んだ。この当時、明治学院の2代総理であり、梶之助の妻せきもまたちかと同じく共立女學校の同窓生で懇意であり、女子学院の教員でもあった。

事興信所編1941：ク53)。倉辻夫妻は5人の子女⁷に恵まれた。ふきは、子育て中も東京音楽学校のピアノの時間講師や「政財界の重鎮たちの子女に個人教授」（櫻井1996：31）をしていたが、大正2年（1913）頃に、櫻井女塾の専任講師に就任し、音楽・英語を担当した。また、大正5年（1916）以後、東京に定住するようになった櫻井女学校の卒業生ガントレット恒（旧姓山田恒）⁸も櫻井女塾で英語を教えていた（千住1982：40）。

卒業生の羽村よう子の回想には、明治40年（1907）頃は15人ほどが常時寄宿していたとある。羽村は小学生の時に寄宿生となり、別の女学校を卒業後、また高等科に再入学、大正7年（1918）に卒業しており、少女時代のほとんどを櫻井女塾で過ごした。高等科では「先生は桜井ちか子先生、ミセスガントレット、ミスモリソン、ミセスエルウィン、八太先生等で、授業は月曜から金曜まで午前中、午後は倉辻ふき子先生のピアノ、辻村晴子先生の国文学、山崎光子先生のお習字、桜井先生のお料理など自由科目でした。」（櫻井編1976：25）との授業の様子や、岡本かの子⁹も寄宿生として一緒に過ごしたなどの逸話を残す。このような櫻井女塾の卒業生の回想は前掲した『櫻井ちか小伝』に7編所収されており、当時の塾の様子が活写されている。

同書とは別に、卒業生の平田章子¹⁰による随筆集が残っている。平田は高等女学校卒業後、勉強への熱望を失い、虚無にさえなりかけていた大正12年（1923）、櫻井女塾に入学した（丘1936：330）。当時について「入学してみるとひどく平凡な学校で、もつと勉強するところがいいなあ、と今さら勝手なことを思ふのだった。だがこの学校はよかつた。程度が低くて先生が少ないのには、當時は不平を持つてはゐたが、小さな学校だけに寺子屋的で、何かしら優しい家庭的な空気が漂つてゐた。わたしの激しい反撥性が矯められて、幾分でも女らしい情緒が培われたのも、櫻井ちか子先生の薫陶のたまものなのである。」（丘1936：331）と回想している。

章子は、女学校時代の憂鬱が櫻井女塾のおかげで明快な性質に立ち戻り、平穏な二年間

-
- 7 明治36年（1903）3月に長男明毅が生まれ、年子で次男龍男（明治37年（1904）生か）、三男勇三郎（明治40年（1907）生）、四男満洲男（明治43年（1910）生）、長女多恵子（大正3年（1914）生）であった。
 - 8 1873～1953年。愛知県出身、実家の山田家は板倉藩（福島）の御殿医であったが、藩主と共に三河国に移った。明治31年（1898）にイギリス人エドワード・ガントレットと結婚、弟は作曲家山田耕筰である。明治11年（1878）、櫻井女学校に6歳で入学し、その後ミセスツルー、矢島楯子に学んだ。女子教育者として活躍する一方、矯風会会員として女性解放運動に尽くし、昭和21年（1946）に日本基督教婦人矯風会の会頭となる（ガントレット1949）。戦中は「岸登恒」と名乗った。
 - 9 1889～1939年。東京出身、歌人・小説家。芸術家岡本太郎の母である。
 - 10 1906～1934年。福岡県小倉市出身、東京府第二高等女学校卒業後、櫻井女塾に入学した。2年在籍し、その後、日本文化裁縫学院に入学、卒業したが、昭和4年（1929）に発病、闘病中に雑誌『令女界』に「丘夕繪」の筆名で多くのエッセイを投稿し、読者（著作集の序文に「全国数十万」とある）から絶大な支持を受けた。29歳で死去後、随筆集『憂恨の湖』（1936年、寶文館）が両親によりまとめられた。

を過ごせたと回想し、また逸話として「ガントレット恒子先生の講義はちよつとよきものであつた。日本人であれくらゐ美しい発音が出来れば満足せねばなるまい。會話の教師ミセス・セラーさんが、わたしを掴へると「お前は笑ふと私のアメリカの友達によく似てゐる、ほんとによく似てゐる」なんて日本語でペラペラ話してかけてくれるのには閉口させられた。」(丘1936:333)との体験談を残す。『令女界』に投稿された章子のエッセイは、皮肉めいた内容に哀愁を感じる文面で読者の支持を集めた。櫻井女塾については、少しの批判を加えながらも、感謝の気持ちを表している。卒業生の回想からは、櫻井女塾の温かい日常が垣間見られる。

ちかは、昭和3年(1928)12月19日に亡くなった。73歳であった。本郷組合教会において、井深梶之助の司式により葬儀が行われ、参列者には内村鑑三が名を連ねた(櫻井編1976:19)。これより前の大正6年(1917)に夫の昭恵は亡くなっており、ちかはふき四男の満洲男¹¹を養子として迎え、櫻井家の嫡子としていた。

横浜共立学園資料室に所蔵されている昭和3年(1928)年7月発行の第36回同窓会会報には、ふきが「私は明治31年3月卒業致しまして、後は上野の音楽学校へ入学いたし、卒業後は同校で長らく教へて居りました。御存じでも御座いませうが英語専門の桜井女塾は私の母が経営いたし、塾長をしておりましたが、四五年前より病弱の為老衰致しましたので私は及ばずながらも塾長代理として可成り忙しい日を過して居ります。」とあるので、ちかが亡くなる前より、ふきが櫻井女塾の中心となっていた。昭和3年(1928)までの卒業生は、本科394名、高等科18名、別科70名、研究科20名であった(千住1982:40)。

昭和4年(1929)2月、50歳になったふきが櫻井女塾の2代塾長に就任した(東京都編1968:155)。同年12月に発行された『婦人の向上一女学校卒業生の進むべき上級学校と選ぶべき職業一』(帝國教育向上社)をみると、櫻井女塾は「専門學校及び高等科、専攻科を有する學校」(修業年限2年、授業料59圓)と「主なる受験豫備校」(修業年限1年、授業料59圓)として紹介されていた(平塩編1929:51)¹²。

塾長となったふきは、「女高師や医専入学志望者の予備校的なところを改め」(櫻井編1976:19)、櫻井女塾の改革を進めていった。翌年5月には高等師範科を新設、昭和6年(1931)には小学校英語科の専科正教員資格が取得できるようになり、昭和8年(1933)に「櫻井女子英学塾」と改称、昭和10年(1935)には高等師範科にて、英語中等教員無試験検定の資格が授与できるようになった¹³(櫻井編1976:19)。

11 1910～1977年。父明義が「やまと新聞」の編集長として、後藤新平と満洲經由でロシアへ随行していた時に生まれたのに因み「満洲男」と名付けられた。立教大学卒業後、文部省宗務課に就職したが1年足らずで退職し、商船会社に勤務していた。その間、松枝と結婚、3男1女に恵まれた。櫻井淳司は次男である。

12 同じく「専門學校及び高等科、専攻科を有する學校」として「日本女子高等學院」が列記され、修業年限3年、授業料88圓とあり、所在地は東京市外野方町であった(平塩編1929:51)。

13 教員免許状授与の改革として財団法人の設立や専門學校としての昇格を目指したようで、それ

ところで、昭和6年(1931)に共立女學校は、創立60年記念祝賀会を挙げており、ふきは同窓会代表として祝辞を述べている。この当時、共立女學校を卒業し櫻井女塾に進学する生徒が多くいたようで「共立と櫻井の関係は年毎に親交の度を深められてゆく様に感じる」(横濱共立學園六十年史編纂委員会編1933:251)と記している。

昭和初期の櫻井女子英学塾の教授・講師陣名簿(櫻井編1976:53)をみると、20名ほどの在籍中、共立女學校出身の英語教師は2名、女性教師は櫻井女塾出身以外に津田英学塾の出身者もいた。また、ふきの夫明義が時事解説、近隣に住む代議士や外務政務次官が政治学を担当したり、現在の専修大学、学習院大学などの教授が本務校と兼務したりしていた。

昭和12年(1937)1月、櫻井女子英学塾は本郷から板橋の校舎に移転した。翌年4月の学術論文誌『英語教育』には在学生による学校紹介が掲載されている。「移転した校舎の窓から一眺闊達の碧空と青一色の平原がみえること、塾生はお互いに助け合いながらグループを作り、積極的な勉強の方法を探っており、家庭的な団欒のうちに英学にいそしんでいる」とあり、更に「社会で活躍している卒業生が多く、絶えず学校に姿を見せることは、長い伝統的精神によって結ばれた心情である」(N.S生1938:105)と記してあった。

3. 日本女子高等學院との合併

昭和14年(1939)9月、ドイツがポーランドに侵攻したことで、第二次世界大戦が勃発した。翌年、日独伊三国同盟が締結されると、アメリカは対日姿勢を硬化、日米衝突を回避するための日米交渉が模索された。しかし、昭和16年(1941)6月、独ソ戦争が始まり、日本の軍部も南部仏印進駐すると、対日経済封鎖であるABCD包囲陣が築かれ、御前会議で開戦を決意、同年12月8日の真珠湾攻撃により宣戦布告、太平洋戦争の勃発であった。

この時期、急激に「敵国語学ふべからず」という英語排撃の世論が高まり、「昭和10年代の戦争気分は、社会一般の英語学習意欲を急速に喪失させ」(千住1982:40)、英語教育を専門とする櫻井女子英学塾への入塾者は減少し、経営が窮地に陥っていった。そして、櫻井女子英学塾は女子教育存続のため「日本女子高等學院」に合併することとなった。

合併した年については、これまでの文献には諸説あった。すなわち、「昭和16年」(人見1987:10、昭和女子大学七十年史編1990:141、櫻井1993:20)、「昭和17年」(塚本編1954:44、櫻井編1976:20、加藤・川島1987:47、櫻井1993:58)、「昭和18年」(塚本編1954:214)¹⁴、なかには「戦前」(東京都編1969:232)だけの記述もあった。加えて、

に伴い校地と校舎の整備、資金援助の懇願などに苦勞した等、塾の主事であった佐合道弥(広島高等師範学校出身)による逸話がある(櫻井編1976:52)。

14 櫻井論文、加藤・川島論文の「昭和17年」の根拠は『昭和女子大生活』(1954年、現代思潮社)を参考にしたか。同書は塚本八重子を中心となり編集した。塚本助教授(当時)は、明治34年(1901)生、大正15年(1926)に日本女子高等學院国文科を卒業し、昭和高等女学校教諭を経て、昭和16年(1941)4月より日本女子高等學院家政科にて教鞭を執った。同書には櫻井女子

昭和女子大学関連の学園史（人見編1971、昭和女子大学九十年史編2010など）の中には合併したことの記載がない文献¹⁵もあった。

当時の日本女子高等學院の所在地は、東京市東中野¹⁶であった。例えば、昭和10年（1935）の「日本女子高等學院要覧」をみると、校長は松平俊子¹⁷、部門（学科）は國文科、英文科、家政科、家政別科であった。國文科（豫科一年、本科3年）、英文科（豫科一年、本科3年）では師範学校・中学校・高等女学校の教員資格無試験検定が認められ、家政科（2年）、家政別科（1年）では和洋裁、家政一般の知識技能が教授されていた。

東中野校舎は、昭和20年（1945）4月13日の空襲により校舎が焼失し、同年5月25日の空襲で寮舎も失っており（人見編1971：57～59）、このため現在の昭和女子大学図書館には学園の戦前の資料が乏しい。

そのようななか、今回の調査で昭和16年（1941）6月号の『光葉』に「櫻井女塾の合併」の記事を見つけることができた。『光葉』とは随筆や時事が掲載された日本女子高等學院の情報誌であり、日本女子高等學院光葉會が発行していた¹⁸。以下に抜粋する（塚本編1941c：22）。

その昔女子の英語は津田か櫻井かとまで世の信用を博した櫻井女塾が、創立以來實に四十年の歴史を有し、目白の女子大、津田英學塾と共に我が女子専門教育

英學塾の合併についての記述があるが、合併した年について「大学の成長」（25～50頁）には昭和17年、大学の概要を示す「資料」（214～227頁）には昭和18年とあった。

- 15 昭和女子大学図書館が所蔵する戦後に発行された学校紹介の各資料をみても、合併したことを知らせる記事を見つけることができなかった。例えば、「良妻賢母の珠を磨く昭和女子大学の校風」（『日本時報』1957年）、「昭和女子大学同大学要覧」1958年、「出色・昭和女子大の巻」（『国文学解題と鑑賞』第33巻11号、1968年）、「私学の独自性を求めて」（『月刊私学公論』1992年）など。
- 16 日本女子高等學院は、大正9年（1920）9月10日、東京市小石川区西江戸川町（現文京区水道）に創立し、大正14年（1925）より東中野に移転した（現在のJR東中野駅より徒歩8分、西武新宿線中井駅、新井薬師駅よりそれぞれ徒歩10分の場所に在った）。校歌にある「朝風薫る武蔵野の～」は当時の所在地に因る。昭和2年（1927）には、昭和高等女學校が付設され、昭和10年（1935）に創立15周年記念式が挙行された。
- 17 1890～1985年。侯爵鍋島直大の六女。姉に梨元宮妃。華族女學校、女子学習院英文専修科を修業し、伯爵松平頼壽の弟姪に嫁した。昭和7年（1932）に日本女子高等學院に着任し、昭和22年（1947）まで奉職した（昭和女子大学七十年史編1990：117・708、松平1991）。
- 18 日本女子高等學院光葉會は、學術論文誌『学苑』（昭和9年（1934）11月創刊）も発行しており、『光葉』は同誌の姉妹誌であった。『学苑』は、第二次世界大戦の影響により、昭和19年（1944）5月号を最後に休刊するが、この間、日本女子高等學院光葉會は『学苑』と『光葉』を統合した内容の『學園學報』を発行した。『学苑』は、昭和25年（1950）1月号（110号～）より復刊し、現在も昭和女子大学近代文化研究所により月刊で継続中、各学科紀要、近代文化研究所紀要の役目を担っており、例えば、令和2年（2020）3月号は953号であった。令和3年度より季刊となる。

の古參校であり、その高等師範科は英語科中等教員無試験検定の特典をも有しガントレット恒子女史その他優位の人材を多數輩出してゐるのだが、時勢に鑑る所あり、今回高等師範科を廢止して本學院英文科に合併する事となり、新學年からその生徒を本學院に収容するに至つた。もともと歴史と校風を異にするとは言えへ英語英文學專攻に於て目的を一にするので新舊知の如く理解し合つて、和氣霽々裡に日々精勵してゐるのは大いに心強い次第である。之と共に塾長倉辻^{ツキ}女史はピアノ、同令嬢倉辻^{ツキ}妙子氏（東京音樂學校出身）はヴァイオリンを、本校随意科に於て教授する事になり、ために本校音樂部は新に倉辻母子を加へて新生面を開き得たよろこびに充ちてゐるのである。

これにより、櫻井女子英學塾が日本女子高等學院へ合併された年は「昭和16年」と確定した。昭和16年度の学園新入生は520名（國文科70名、英文科40名、家政科260名、付属高女は160名）あり、前年に講堂と8教室を増築、また「一特色」である学寮も増築された¹⁹ばかりであった。記録によると「櫻井女子英學塾より学生8名を英文科に転入、倉辻校長と教師3名を本学に迎えた。」（塚本編1954：44）とあり、在校生の数から、合併直前の櫻井女子英學塾は時勢に抗しきれずにいたことがわかる。

『光葉』 同号には、「教授陣の充実」という記事もあり、英文科には姫路高等學校長であった金子健二教授と、櫻井女子英學塾の川崎勝子教授の就任が記載されていた。ちなみに、前号である同年5月号『光葉』にも、新任教師として「三井芳太郎文學士（東京帝第文學部哲學科出身）櫻井女子英學塾教授たりし同氏は家政科教育擔當」（塚本編1941b：22）の記載があった。

また、『昭和女子大生活』及び『昭和女子大学七十年史』には、「櫻井女塾は櫻井ちか子や矢島楯子によって明治9年設立されたもの」、「櫻井女塾はガントレット恒子を輩出した」（塚本編1954：43、昭和女子大学七十年史編1990：140、818）のような、「櫻井女学校」と「櫻井女塾」を混同した記述が数か所あったことをここで指摘しておく。

ところで、日本女子高等學院との合併の切掛けは何であったのか。『昭和女子大生活』に「本学講師にして又同校講師でもあつた富田彬を介して…」（塚本編1954：44）とあり、『昭和女子大学七十年史』にも同様の記述がある。

この富田彬を調査すると、昭和6年（1931）に刊行した『明日を待つ彼』（千倉書房）に、「立教を代表するような名物教授」「英文學の権威、近代英文學雜考等の著書もある人」（国民新聞政治部編1931：125）とある。同書にある妻の富田鶴子の逸話には、明治

19 これ以降、日本女子高等學院の学寮（寄宿舍）は四つ、構内に櫻寮、橘寮（中野区江古田）、桂寮（中野区櫻山町）、葵寮（中野区昭和通）、その他に田園学寮として村山学寮（北多摩郡村山）が在った。

29年(1896)頃²⁰、栃木県に生まれ、大正15年(1926)より立教大学に奉職、当時6歳を第1子に三人の子どもがおり、温順な性格で子ども好き、趣味は芝居、映画(国民新聞政治部編1931:126)とあった。

富田は日本女子高等學院には、いつから勤務したのであろうか。戦前の職員名簿は戦災で焼失しており、昭和女子大学図書館に残る一番古い『光葉會職員名簿』は、昭和27年度(1952)である。「旧教特別会員(母校旧教職員)」に富田彬(住所には栃木県宇都宮市とある)、倉辻フキ(昭和20年死去とのみある)の名前はあったが、勤務開始年や勤務年数の記載はなかった。

学術論文誌『学苑』に掲載された富田の論文・随筆は、昭和13年(1938)5月号を初めに、昭和19年(1944)3月号まで15編あった。そのなかで、昭和14年(1939)3月号の論文「大戦後の英文學」²¹には「本學院英文科教授、立教大學教授」との紹介があった。昭和16年(1941)3月号の『光葉』には、富田に関する「立教大學英文科科长に就任されたり但し本校授業は従前の通り」(塚本編1941a:20)との記事を確認できた。

富田とふきの接点を考えると、ふきの四男で、ちかの養子として櫻井家を継いで櫻井女子英学塾を手伝っていた満洲男が立教大学出身であった²²。少し年が離れているが、音楽活動で目立っていた満洲男と富田のつながりがあったことも考えられるが、それを示すはっきりとした資料は見付からなかった。立教大学に加え、日本女子高等學院に櫻井女子英学塾にと、富田の広い交友関係が合併を実現させたと推測できる。

4. 戦前の日本女子高等學院の英語教育

戦前に、富田及び日本女子高等學院の英文科が英語並びに英語教育を大切にしていたのは、資料として残っている。昭和16年(1941)7月号の『光葉』には、「英語英文學夏期講習會」の案内が掲載されている。この年の夏、日本女子高等學院主催で各大学の教授を招聘し、東京帝国大学文学部の教室で、語学研究・文学研究に関する夏期講習會(夏期公開講座)を開く計画であった²³。(写真1)

20 昭和6年(1931)刊行当時、「大正十三年の夏に結婚し、今富田は三十五、私は七つ下です」(国民新聞政治部編1931:125)との記述がある。

21 第一次世界大戦を契機として起こった英文学界の作家の性格・作品の動向、時代意識についての論考であった。その他、『学苑』には、「アメリカ精神の形成」(昭和16年10月号)、「アメリカ文学思潮—国民文学形成まで—」(昭和17年9月号)などの論考がある。

22 満洲男も音楽家であり、チェロを習っていた。同窓生に映画俳優・上原謙(トランペット)がいる。大学生のころには、立教大学交響楽団に所属するかたわら、東京音楽学校の嘱託として、定期演奏会や日本各地、上海の演奏旅行の一員に加わった一方、大学の英語劇の演劇サークルに所属し、役者として出演していた(櫻井1996:32)。

23 全国の教職員に呼びかける夏期公開講座は、人見圓吉理事長の「教育とは儲け仕事ではない。例え僅少でも余裕が生じたら、今までお世話になった世の中にそれを学問と教育とで還元すべきだ」という発想のもと、昭和7年(1932)より続く名物講座であった(昭和女子大学七十年史編1990:176)とある。令和2年(2020)10月より開催された昭和女子大学図書館による「昭

究 研 學 文

究 研 學 語

英文學 夏期講習會

▲古き傳統に輝く英文學を新しき領野に突き進む。英文學とを檢討し、英語の特色を極し、正に英語法を英米文學の研究者の眼に值す。

英語の發音とアクセント
英語教授法の諸問題
英語の生活の朝夕
歐米の語學教育と我が英語教育
ワッツワースの文學原理
アメリカ文學思潮

東京外國語學博士 細江逸
東京高等師範學教授 寺西武
早稲田大學教授 萩原恭
日本女子高等學院教授 トレギア・ジョンズ
日本女子高等學院教授 ミゼブ・セーラ
日本女子高等學院教授 富田健
立教大學教授 金子健
日本女子高等學院教授 富田健
日本女子高等學院教授 富田健

▲會期 自七月廿八日—至八月二日 ▲會場 東京帝國大學文學部教室 ▲會費 五圓
▲講習終了者には修了證書授與 ▲聽講希望者は男女を問はず。但演員の節に對絶の事あり。

院學等高子女本日 野中東市京東 催主
番二七五二野中話電

写真 1 「英語英文學夏期講習會」の案内
 (『光葉』昭和16年7月号より転載)
 昭和女子大学図書館所蔵

しかし、同年9月号の『學園學報』（『光葉』の改題）には（夏期講習會の發表後）「内地は勿論朝鮮・臺灣・樺太を始めとし、滿洲・支那の各地から申込者殺到し、忽ち五百名を突破する盛況を呈したが、一方内外の國際情勢が愈々切迫するかの如く感じたので、文部省に出頭し種々交渉の結果、この際中止すべきを決意したのであつた。」（塚本編 1941d : 12）とあり、英語排撃の影響があつたことが資料より窺える。その後、翌昭和17年（1940）年9月号『學園學報』には、夏期講習會を「夏期大学」と改称、会場を本校とし、國文學講座と英文學講座を一緒に実施し、482名の参加者を得たとの記事があつた。英文學講座の講演者は前年の予定者とほぼ変わらなかつた。

その後の英文科の夏期公開講座は、昭和18年（1944）に第13回夏期大学英文學講座が開催されたのを最後に、戦局が苛烈し中止となり、終戦を迎えた（昭和女子大学七十年史

和女子大学創立100周年記念特別展・新収貴重資料展Ⅱでは「國文科夏期大學講座記録」（記録ノート）が展示されたが、ここでは國文科の記録として第1回が大正13年（1924）、第2回が昭和7年（1932）、第3回が昭和9年（1934）、第4回が昭和11年（1936）に開催され、第4回以降は昭和15年（1940）まで毎年開催されたことが説明されていた。これについて『學園學報』（昭和17年9月号）には、「昭和4年以來毎年休暇中に開催した本学主催の夏期講習會」とあつた。「夏期公開講座」がいつから始まったのかの文献調査を今後の課題としたい。

編1990:184)。櫻井女子英学塾が校運衰退した昭和16年(1941)は、日本において英語排撃の世論が一番高まっていた時期であり、同年12月の太平洋戦争勃発に至る過程が、教育界の動向も大きく左右していたことが推察できる。

このような情勢下、日本女子高等學院は英語排除の世論を危機とし、これに警鐘を鳴らす立場であった。例えば、戦後すぐに昭和女子大学初代学長となる金子健二教授による昭和17年(1942)10月号の『学苑』に掲載された「鷗米の外國語教育と我が英語教育に就て」²⁴をみると、昭和10年代に盛んになった貴族院での議員三上参次による英語廃止論の発表や東京帝国大学教授の藤村作の英語全廃論などを挙げている。

貴族院議員の三上参次(1865～1939年)は、東京帝国大学出身の同大学教授、歴史学者であった。昭和10年(1935)2月に貴族院で第2回目となる強硬な英語廃止論を唱え、昭和12年(1937)3月には第3回目の意見発表を行った(金子1942:5)。また、藤原作(1875～?)は東京帝国大学出身、同大学教授、国文学者であった。アメリカにおける排日移民法案の成立などを背景に、昭和2年(1927)に発表した「英語科廃止の急務」(『現代』5月号)は多くの反響を与えており(八田2003:112)、昭和13年(1938)3月発行の『文藝春秋』にも「中学英語科全廃論」を発表していた。藤原作の英語全廃論に関しては、北沢論文に詳しい(北沢1984)。

金子論文は、これらは英語を苦手とする人の屈辱的な感情であり、日本の英語科の基礎的準備が貧弱であったためと謝り、慰めたうえで、「わが國には古來動もすれば目前の出來事に封執せられて、百年の大計を誤らんとする者が餘りにも多い。」(金子1942:5)と主張した。昭和17年(1942)7月8日付で、女学校での英語科の必修が廃止された時であった。随意科となったことに憤りを覚えた内容が続き、文部省に対する批判を訴える論文であった。

結論には「現在の本邦英語教員は未曾有の受難期に遭遇している。しかし乍ら苟も教育家としての良心に生命をさゝげ、又英語研究に學究的満足を見出し得る者であるならば、如何なる受難期に遭遇しても、悲觀的又退嬰的氣分に襲はれる筈はなかるうと思ふ」(金子1942:16)と書いている。

他方、金子論文には、同年8月22日付の東京朝日新聞の英語教育縮小の記事を受けての附記があり、そこには「英語の教育的價値を今更論じてみたところで事實的には何の意味も無い」、「大東亞戰完遂ためにどうしても此の大改革が必要だと、文政當局が責任をもって聲明している限りは……その命じる所に随順して自己の最善を盡すのが當然だと思ふ」と刻々と変化する世論を慮る気遣いもみられた。しかし、英語教育について「その是非の議論は將來の歴史が決定していくれるであらう」(金子1942:17)との希望を持って締められている。

24 戦後の昭和25年(1950)には「英米文學科の將來」を『学苑』119号に寄稿している。

日本女子高等學院に残る逸話には（日清、日露の両戦時を身を以て経験している人見圓吉先生は）「戦争は短絡的現象だ、やがて永い平和の時代が来る、そのための準備をととのえておかねばならない。なるほど、英語は今は敵国語であるが、他面世界語ないし国際語的特性を持っておる言葉だから、その研究を怠ってはならない。」（昭和女子大学七十年史編1990：142）との記録がある。戦前及び戦中に、日本女子高等學院が英語排撃の世論に憂慮を示していたことは、英語科のみならず学校全体の見解であったことが分かり、日本女子高等學院がこの時期に英語専門の櫻井女子英学塾の合併について応じたことは当然至極のことであつたらう。

ところで、昭和18年（1943）9月号の『學園學報』には「現代女性生活の意義」と題した「岸登恒」（ガントレット恒）による寄稿が掲載されている。同号は雑誌用紙統制のため、紙面が小さく記事も少しであつたが全23頁中8頁に及ぶ大作であつた。世界が混乱に在る今日だからこそ、謙虚・従順・辛抱・思慮深く・聡明さを持つことがいかに必要かを説き、戦中での女性の生き方を啓発する内容であつた。

ガントレットは、大正期には櫻井女子英学塾の他に、私立東京女子大学や自由学園で教鞭を執つたり、婦人参政権運動に参加したり、日本婦人平和協会を発足させた（ガントレット1949：93～127）。自伝の『七十七年の想い出』（植村書店）には日本女子高等學院のことは載っていないが、『學園學報』に寄稿をしていた事実は、櫻井女塾の教鞭を執っていたガントレットが日本女子高等學院と繋がりがあつたことを示している。

かくして、櫻井女子英学塾は日本女子高等學院に合併された。昭和19年（1944）の「本校概要」（昭和女子大学図書館所蔵）には、当時の教職員が列記されている。「本校職員」として松平俊子校長をはじめ、60名程度の職員が記名され、「藝術 前東京音楽学校助教授 倉辻^{ママ}フキ」の名前を見つけることができた。

5. おわりに

ふきは、戦災で亡くなった。昭和20年（1945）5月25日の東京大空襲の夜、「赤坂溜池の読売病院に入院加療中であつた夫君をリアカーに乗せて、戦災避難中であつたが、ついに力つきて赤坂溜池の路上に夫婦共焼死した。……遺族を迎えて本学主催の追悼会を中野区高田万昌院で施行したのは同年の九月である。」（塚本編1954：45）とあつた。ちかと同じく、ふきの墓所は染井霊園にある。また昭和女子大学の「先哲之碑」に合葬されている（昭和女子大学七十年史編1990：743）。参考として、巻末に櫻井女塾と櫻井家・倉辻家の関連年表を添付する。

本論文の調査では、昭和女子大学の淵源のひとつである櫻井女塾（櫻井女子英学塾）と日本女子高等學院との合併の年次を確定できたこと、戦前の日本女子高等學院は英語排撃の世論のなか英語研究・英語教育を続けていたこと、当時の教職員の繋がりと理念、すなわち「百年の大計」を大切にしていたこと等を確認できた。昭和女子大学に連綿と続いている女子教育と教育者の精神を知る重要な作業であつたと思う。

創立百周年を迎え、グローバル化・多様化する社会のなかで、これからまた新たな百年が始まる。建学の精神、不易の目標を大事にしながら、先を見据え、女性が輝き人生を拓くための教育研究活動を続けていきたい。今後の課題として、日本女子高等學院の戦前の夏期公開講座に関する整理と、現代に脈々と受け継がれる女子教育と女子教育者同士の繋がりを更に解明していきたいと考えている。

【付記】

本論文を作成するにあたり、荒木美智子氏（横浜共立学園資料室）、倉辻明男氏、櫻井淳司氏、昭和女子大学図書館に大変お世話になりました。記して御礼申し上げます。

【引用文献】

- N.S生 1938 「學窓通信—櫻井女子英學塾—」『英語研究』第31巻第1号 英語研究社。
- 大月久子編 1905 『新撰東京女子遊學案内』文學同志會。
- 丘汐繪 1936 『憂恨の湖』寶文館（平田増吉編）。
- 加藤澄江・川島麻由美 1987 「明治期の女性による食物教育・食生活啓蒙論」『女性文化研究所紀要』創刊号 42～55頁。
- 金子健二 1942 「鷗米の外國語教育と我が英語教育に就て」『学苑』1942年7月号。
- ガントレット恒 1949 『七十七年の思い出』植村書店。
- 北沢達雄 1984 「わが国英語教育史の一断面—昭和初期における藤村作の英語廃止論をめぐって—」『清泉女学院短期大学研究紀要』2号 71～76頁。
- 国民新聞政治部編 1931 『明日を待つ彼』千倉書房。
- 小林恵子 1981 「草創期の幼稚園と女子教育に関する一考察—横浜のミッションホームを中心に—」『日本教育学会大会研究発表要項』40 30頁。
- 小林恵子 1982 「日本における最初の私立幼稚園とその背景（5）桜井ちかと桜井女学校附属幼稚園」『幼児の教育』81巻8号 33～43頁。
- 小林恵子 1983 「日本で最初の私立幼稚園の誕生に貢献した婦人宣教師—アメリカン・ミッション・ホーム（現・横浜共立学園）を起点として」『国立音楽大学研究紀要』18号 224～209頁。
- 小林恵子 1984 「最初の私立幼稚園に関する一考察（その四）—英和幼稚園を中心に—」『日本保育学会研究論文集』37 62～63頁。
- 小林恵子 1986 「日本で最初の保育者養成に関する一考察—桜井女学校幼稚保育科を中心に—」『国立音楽大学研究紀要』21号 196～182頁。
- 小林恵子 1988 「桜井女学校幼稚保育科の創立者M.T. ツルー日本で最初の保育者養成に関する一考察」『国立音楽大学研究紀要』23号 224～211頁。
- 櫻井淳司編 1976 『櫻井ちか小伝—櫻井女塾の歴史—』櫻井女子英學塾友会。
- 櫻井淳司 1993 『ニューライフカレッジ—志教育脱学校をめざして—』燦葉出版社。

櫻井淳司1996『夢を抱きて荒野をゆく―いのちの教育の泉を追い求めて―』インターナショナル
ニューライフカレッジ出版部。

昭和女子大学九十年史編2010『昭和女子大学九十年史』昭和女子大学。

昭和女子大学七十年史編1990『昭和女子大学七十年史』昭和女子大学。

人事興信所編1941『人事興信録』13版上 人事興信所。

千住克己1982「桜井ちか研究ノート」『静岡女子短期大学研究紀要』30号 29～44頁。

塚本八重子編1941a『光葉』3月號 日本女子高等學院光葉會（発行人保坂都）。

塚本八重子編1941b『光葉』5月號 日本女子高等學院光葉會（発行人保坂都）。

塚本八重子編1941c『光葉』6月號 日本女子高等學院光葉會（発行人保坂都）。

塚本八重子編1941d『學園學報』9月號 日本女子高等學院光葉會（発行人保坂都）。

塚本八重子編1954『昭和女子大生活』現代思潮社。

東京都編1968『東京の各種学校』都史紀要17 東京都。

東京都編1969『東京の女子大学』都史紀要18 東京都。

日本の英学一〇〇年編1968『日本の英学一〇〇年』明治編 研究社。

八田洋子2003「日本における英語教育と英語公用語化問題」『文教大学文学部紀要』16巻2号 107
～136頁。

人見楠郎編1971『学園の半世紀』昭和女子大学中高等部光葉会。

人見楠郎1987『昭和教育源流考』大学の巻 昭和女子大学近代文化研究所。

平塩左右吉編1929『婦人の向上一女学校卒業生の進むべき上級学校と選ぶべき職業―』帝國教育向
上社。

松平吉弘1991『われ道標とならん―松平俊子の半生―』私家版。

横濱共立學園六十年史編纂委員会編1933『横濱共立學園六十年史』横濱活版舎。

(えんどう ゆきこ 歴史文化学科非常勤講師)

櫻井女塾と櫻井ちか・倉辻ふきに関する略年表

年	西暦	月日	ふき年齢 目安	出来事
弘化2年	1845			櫻井昭恵、伊予国喜多郡若宮村（現愛媛県大洲市）に誕生。
安政2年	1855	4月4日		ちか、日本橋（江戸）の平野家に誕生。
明治5年	1872			昭恵・ちか、結婚。
明治7年	1871			ちか、受洗。
明治8年	1873			ちか、共立女学校で学ぶ。
明治9年	1876	10月14日		ちか、櫻井女学校を創立。 昭恵、受洗。
明治11年	1878	7月		ちか、貧学校を開校。
明治12年	1879	12月15日	0歳	ふき、宮城家の次女として誕生。昭恵・ちか夫妻の養女となる。
明治13年	1880	4月	1歳	ちか、貧学校を閉校し、櫻井女学校附属幼稚園を創立。
明治14年	1881	7月	2歳	ちか、櫻井女学校を矢島楯子へ委譲。
				櫻井一家、函館へ渡る。
		夏		ちか、函館師範学校に勤務。
				昭恵、講義所にて伝道。
明治17年	1884	末	5歳	櫻井一家、高知に移住、布教
明治18年	1885	春	6歳	櫻井一家、昭恵の郷里・大洲に移住。
明治19年	1886		7歳	ちか、大阪一致女学校の創立に協力。
明治20年	1887		8歳	昭恵、松山に大洲教会を結成。
明治23年	1890	末	11歳	昭恵・ちか、福井県敦賀の教会へ転属。
				ふき、共立女学校に入学（寄宿生）。
明治26年	1893		14歳	ちか、アメリカへ遊学（2年間）
明治29年	1896		17歳	ちか、アメリカへ遊学（1年間）
明治31年	1898	4月	19歳	ちか、櫻井女塾を創立（ちか43歳）。
				ふき、共立女学校を卒業、東京音楽学校に入学。
明治34年	1901	7月	22歳	ふき、東京音楽学校を卒業。
明治30年代				ふき、倉辻明義（明治10年生）と結婚。
明治40年	1907		28歳	ちか、アメリカへ遊学
明治41年	1908		29歳	ふき、東京音楽学校講師（ピアノ）に就任。
明治45年	1912		33歳	ふき、東京音楽学校を退職。
明治末～大正期				ちか、料理研究者として西洋家庭料理を多くの雑誌で紹介。
大正2年	1913		34歳	ふき、櫻井女塾教授（英語・音楽担当）専務となる。
大正6年	1917		38歳	昭恵、死去（72歳）。
昭和3年	1928	12月	49歳	ちか、死去（73歳）。
昭和4年	1929	2月	50歳	ふき、櫻井女塾長となる。
昭和5年	1930	4月	51歳	櫻井女塾に高等師範科を新設。
昭和6年頃	1931		52歳	櫻井女塾に小学校英語科の専科正教員資格を与える。
昭和8年	1933		54歳	櫻井女子英学塾と改称。
昭和10年	1935		56歳	櫻井女子英学塾（高等師範科）に文部省英語中等教員無試験検定の資格が与えられる。
昭和12年	1937		58歳	櫻井女子英学塾、板橋の新校舎に移転。
昭和16年	1941		62歳	櫻井女子英学塾、日本女子高等学院と合併。
				ふき、日本女子高等学院で芸術（ピアノ）を担当。
昭和20年	1945	3月	66歳	東京大空襲で明義が負傷。
		5月25日		ふき、戦災避難中、明義と行方不明になる（死去）。
		9月		日本女子高等学院主催の追悼会を万昌院（中野区高田）で施行。

【出典】参考文献より筆者作成、櫻井ちか・倉辻ふきに関する詳細な経歴は拙稿「明治大正期の女子教育者櫻井ちか・倉辻ふきに関する研究—「櫻井女塾」創立以前とその家族など—」『学苑』965号（2021年3月刊）に記載する。

(櫻井家・倉辻家系図)

